

社交不安傾向者におけるスピーチ場面での回避行動とパフォーマンス低下に関する検討

A study of avoidance behavior and speech performance degradation in social anxiety tendencies

岩田 彩香 (Ayaka Iwata) 指導：熊野 宏昭

問題と目的

社交不安障害 (Social Anxiety Disorder: SAD) 患者は恐れる社会的状況で不安を和らげるために内潜的、もしくは外顕的な回避行動を行っているが、回避行動を行う程度が増えることはSADを助長する要因となる (APA, 2000)。Acceptance and Commitment Therapy (ACT) では、体験の回避がSADの維持・悪化につながるとしている (Luoma et al., 2009)。体験の回避とは、否定的に評価された特定の私的出来事を、避けたり、抑制したり、それらの私的出来事やそれを引き起こす文脈の形態や頻度を変えようとする試みや努力を指し (Hayes et al., 1996)、負の強化随伴性で維持される行動的プロセスである。

SADにおいて最も不安を喚起する社会的状況としてスピーチ場面が報告されており (Stein et al., 1996)、内潜的・外顕的な回避行動、および両回避行動に共通して含まれる可能性が高い行動的プロセスである体験の回避はスピーチパフォーマンスの低下に影響していると考えられるが、どのように関連して影響しているかについては、十分に明らかにされていない。本研究では、スピーチ場面を取り上げ、実際に生じた体験の回避を測定する尺度を作成し、社交不安傾向者において、内潜的・外顕的な回避行動と体験の回避がどのように関連してスピーチパフォーマンスの低下に影響しているのか実験的に検討することを目的とする。

【研究1】 26名 (男性9名, 女性16名, 年齢 (平均 \pm SD) 19.96歳 \pm 1.28歳) を対象に、スピーチ課題を用いた実験を実施した。測度は、スピーチ中の体験の回避の尺度、VAS, AAQ-II (木下他, 2008 ; 嶋他, 2013), SPS (金井他, 2004), LSAS-J (朝倉他, 2002) を用いた。

文献をもとに、スピーチ場面で体験され回避の対象になる可能性の高い私的出来事から項目を作成し、実際に体験した項目について、避けようとした意図と結果の下位尺度に回答を求めた。項目検討から、第6項目を除く全6項目から構成される尺度が作成され、十分な基準関連妥当性および収束的妥当性を持つことが示された。また、概ね十分な信頼性を持つことが示された ($\alpha = .73$) が、今後さらに人数を増やして再検証する必要がある。

【研究2】 研究1と同様に実験を実施し、LSAS-Jの得点が

30点以上であった36名 (男性8名, 女性28名, 年齢 (平均 \pm SD) 19.75 \pm 1.30歳) を対象とした。測度は、LSAS-J, SPS, スピーチ中の体験の回避, 内潜的な回避行動, 外顕的な回避行動, VAS, BASA (根建, 1989) を使用した。

相関分析の結果、スピーチパフォーマンスの低下には、体験の回避や内潜的な回避行動ではなく外顕的な回避行動のみが関連することが示唆された。さらに、体験の回避の得点で群分けした相関分析の結果から、外顕的な回避行動は、体験の回避と共通する機能を有する程度に関わらず、スピーチパフォーマンスの低下につながり、内潜的な回避行動は、体験の回避が低い場合にのみスピーチパフォーマンスの向上につながる可能性が示唆された。

また、研究2から、“内潜的な回避行動”を測定する尺度が測定していた対象は、“内潜的な安全確保行動”であると解釈する方がより適切であると考えられた。

【研究3】 内潜的な安全確保行動, 外顕的な回避行動の尺度について、AAQ-II, CBES (宮前, 2000), WBSI (堀池他, 2001), ABIS (岡島他, 2006) を用いて質問紙調査を実施し、尺度の妥当性を検討した。SPS, LSAS-J によってスクリーニングを行い、118名 (男性42名, 女性70名, 不明6名, 年齢 (平均 \pm SD) 19.70 \pm 1.43歳) を対象とした。

相関分析の結果、スピーチ場面を想定した尺度としては、十分な妥当性が得られない結果となった。また、内潜的な安全確保行動は、思考抑制とは関連のない機能を持つことが示され、外顕的な回避行動は、恐怖場面内での外顕的な回避行動を測定する尺度として、十分な妥当性が示された。

総合考察

本研究により、スピーチ場面で生じた体験の回避を測定する尺度が作成され、直接スピーチパフォーマンスには影響しないが、その程度が内潜的な安全確保行動のスピーチパフォーマンスへの影響性に関わる可能性が明らかになったといえる。また、外顕的な回避行動は、体験の回避の程度に大きく影響されずスピーチパフォーマンスの低下につながることを確認できた。今後は、スピーチパフォーマンスを低下させる機能を持つ内潜的な回避行動の形態を整理し、本研究で作成した体験の回避, 外顕的な回避行動を測定する尺度との関連を検討する必要がある。